

第 1 章 亀岡市の概要

第 1 章 亀岡市の概要

1 社会構造

(1) 人口・世帯数

市制開始の昭和 30（1955）年 10 月 1 日現在の人口は 42,537 人（8,520 世帯）であり、平成 12（2000）年の 94,415 人をピークとして、平成 30（2018）年 1 月 1 日現在の人口は 89,783 人（世帯数 38,718 世帯）と微減傾向にある。一方、世帯数は年々増加傾向にある。

また年齢 3 区分別の人口の推移をみると、65 歳以上の割合が平成 12（2000）年には 14.1%であったものが、平成 27（2015）年には 26.5%となっており、高齢化が徐々に進んでいる。

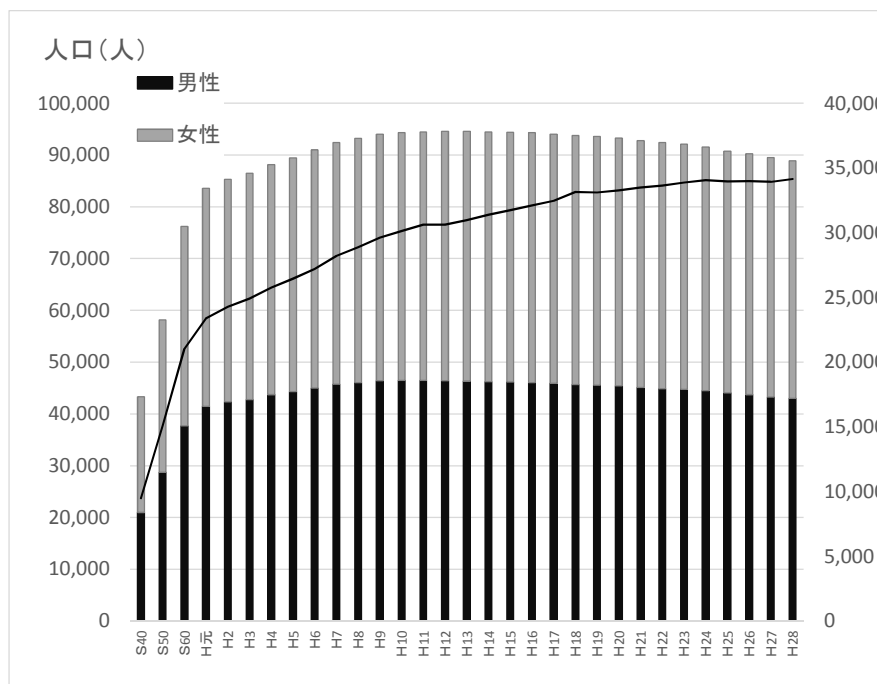


図 1-1：亀岡市の人口と世帯数の推移（各年 10 月 1 日現在）

出典：平成 28 年版亀岡市統計書より作成

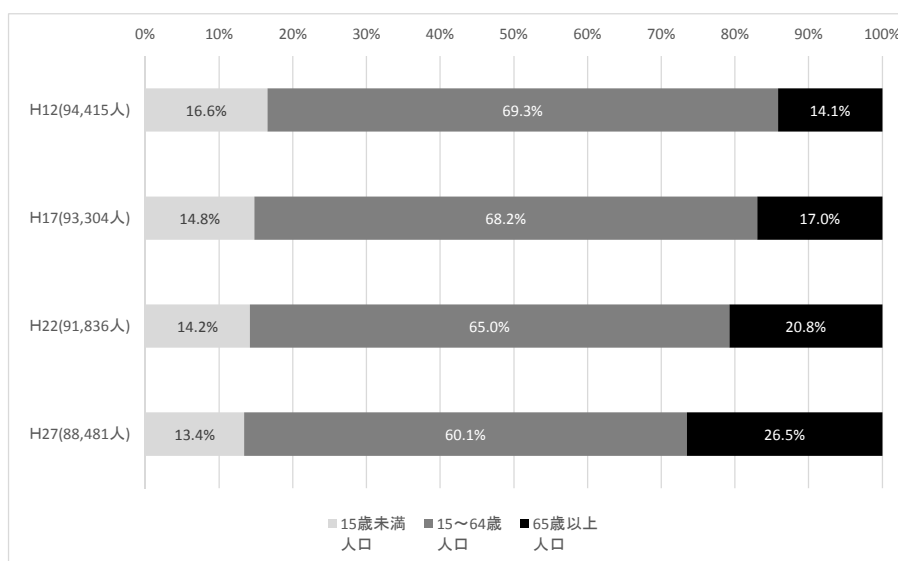


図 1-2：年齢 3 区分別人口割合の推移

出典：国勢調査結果より作成

(2) 交通体系・産業構造・観光動向

1) 交通体系

鉄道は、J R 山陰本線が市街地と桂川に沿って縦貫し、東は京都中心部方面、西は府北部の丹後地域へと結ばれている。平成 22 (2010) 年 3 月には、J R 山陰本線 (京都駅～園部駅間) の複線化事業が完了し、京都中心部方面との利便性が向上した。

道路は、古くから国道 9 号を広域的な基幹幹線としてきたが、慢性的な混雑を解消するため、高規格幹線道路である京都縦貫自動車道の整備が進められ、平成 27 年 (2015) 7 月に全線が完成した。また、平成 25 (2013) 年 4 月に京都第二外環状道路 (沓掛 I.C～大山崎 J.C.T・I.C 間) が開通したことにより、京都縦貫自動車道は、大山崎ジャンクションによって、名神高速道路とも連結された。さらに、整備が進められている新名神高速道路により、周辺都市圏との連携強化が期待されている¹。

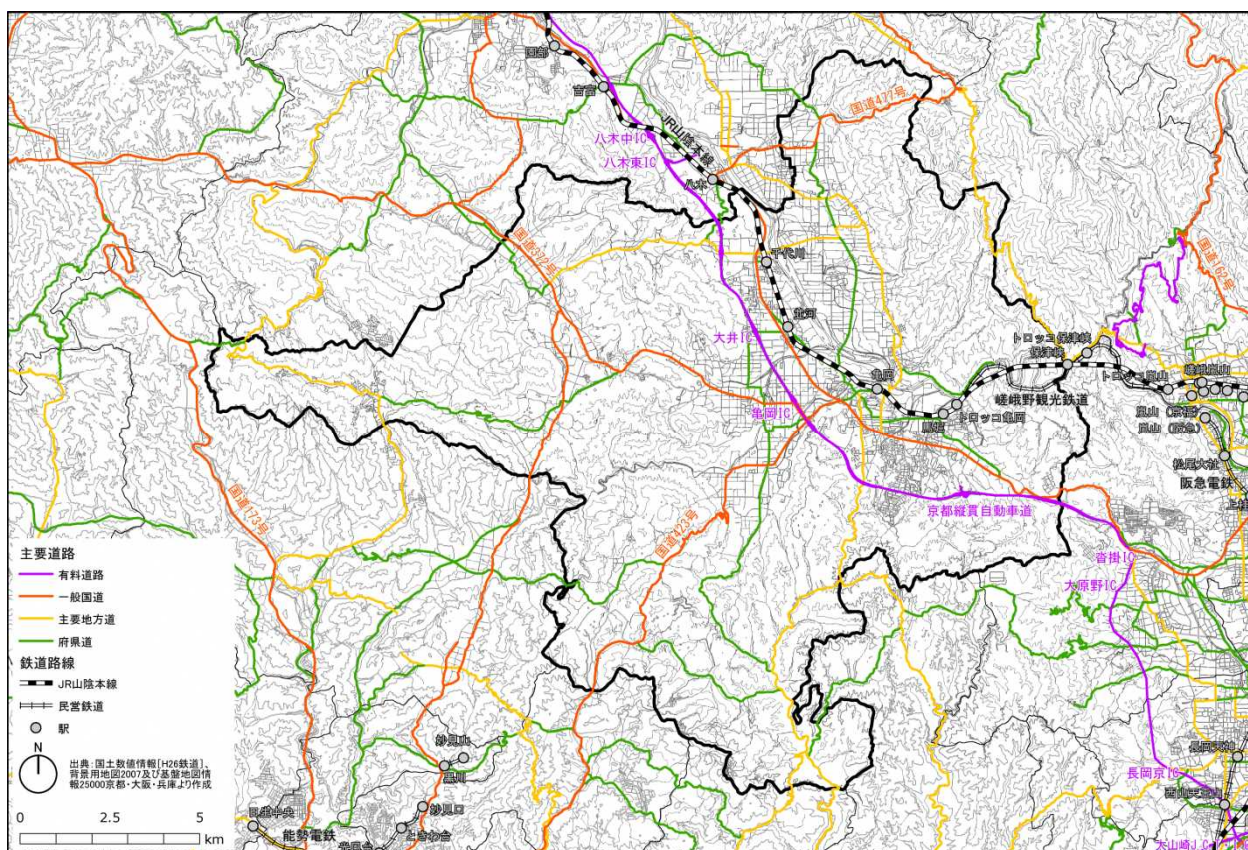


図 1－3：主要な交通網

出典：国土数値情報 [H26 鉄道]、背景用地図 2007 及び基盤地図情報 25000 京都・大阪・兵庫より作成

2) 産業構造

①産業の移り変わり²

亀岡盆地は、灌漑用水やため池によって水田に利用され、良質の「丹波米」を産し、京都府の穀倉地といわれた。丹波米はその他の物資とともに、保津川による舟運と旧山陰道老ノ坂越えの陸路によって京都に運ばれた。また馬路や西別院を中心に、養豚・酪農も盛んであった。その他として、生姜 (千代川)、トマト、栗等の特産品の栽培が行われ、寒天 (東別院、西別院、本梅、畑野)、砥石 (宮前) などの特産品が作られていた。また鹿谷の大谷鉱山ではタングステンが採掘されていた。

¹ 亀岡市緑の基本計画 (平成 26 年 3 月)

² 日本地誌研究所 (編) (1973) 「日本地誌第 14 巻 京都府・兵庫県」

第1章

丹波及び亀岡周辺の木材は、古くから保津川水運によって都に運ばれ、寺社等の建築に用いられた。戦後、北洋材の輸入により木材業界が振るわない時期があったが、パルプ材等の需要増により安定し、伐採や運搬の機械化が急速に進んだ。

食料品工業としては、在来の伝統的な菓子をはじめ、こんにゃく、豆腐、うどん、漬物加工、佃煮、麴など小規模なものが多かった。これに対して近代化されたものとしては、洪積層中の豊富で良質な地下水を活かしたみりん・焼酎・ジュース等の製造業（余部町）、タケノコやグリーンピースの缶詰工場（篠町野条）などがあった。また宮前や千代川、旭、千歳では養鶏が盛んであった。

観光業をみると、保津川下りについては、夏目漱石著の「虞美人草（明治 40（1907）年）」にも、保津川遊船の盛況ぶりが描かれている。温泉については、戦国時代、傷の治療目的で湯治小屋を作ったと伝えられており、昭和 34（1959）年頃には湯ノ花集落に簡素な旅館が営まれていた。昭和 37（1962）年より亀岡市が葎田野町周辺に分譲宅地を造成し始め、「湯の花温泉郷」として以降、温泉を楽しむ観光客が増えた。

②現在の産業構造

○産業別就業者数

亀岡市の産業別就業者数の割合（平成 22（2010）年 10 月 1 日現在）は、第 3 次産業が 63.2%と最も多く、次いで第 2 次産業（25.6%）となっており、第 1 次産業は 3.8%である。

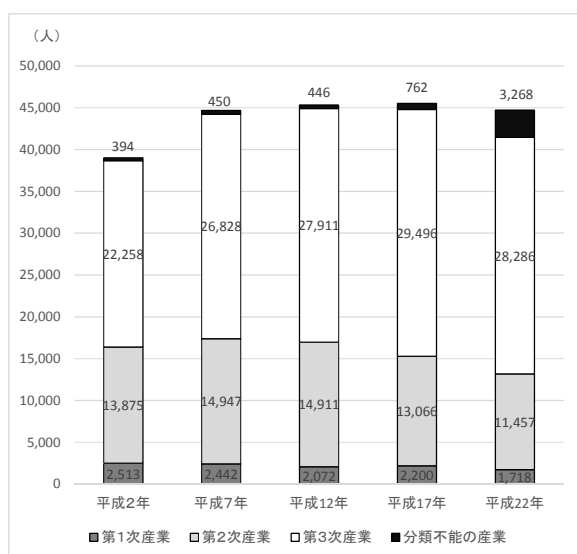


図 1-4：産業別就業者数の推移

出典：国勢調査結果より作成（各年 10 月 1 日現在の値）

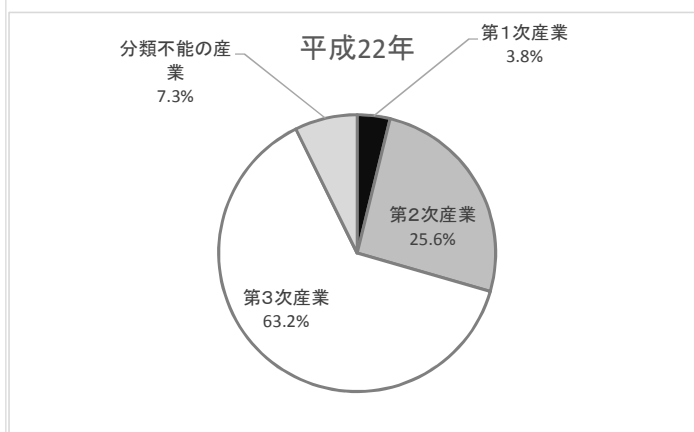


図 1-5：産業別就業者数の割合（平成 22 年）

出典：平成 28 年度版亀岡市統計書より作成

注）第 1 次産業とは、農業、林業、漁業をいう。

第 2 次産業とは、鉱業、採石業、砂利採取業、建設業、製造業をいう。

第 3 次産業とは、電気・ガス・熱供給・水道業、情報通信業、運輸業、郵便業、卸売業、小売業、金融業、保険業、不動産業、物品賃貸業、学術研究、専門・技術サービス業、宿泊業、飲食サービス業、生活関連サービス業、娯楽業、教育、学習支援業、医療、福祉、複合サービス事業、サービス業、公務をいう。

○商工業

平成 25（2013）年度の市内総生産をみると、製造業、サービス業、不動産業の割合が高く、市にとって重要な産業となっている。特にものづくり産業（製造業）の比重が高く、市内総生産、全事業者の2割強を占める。

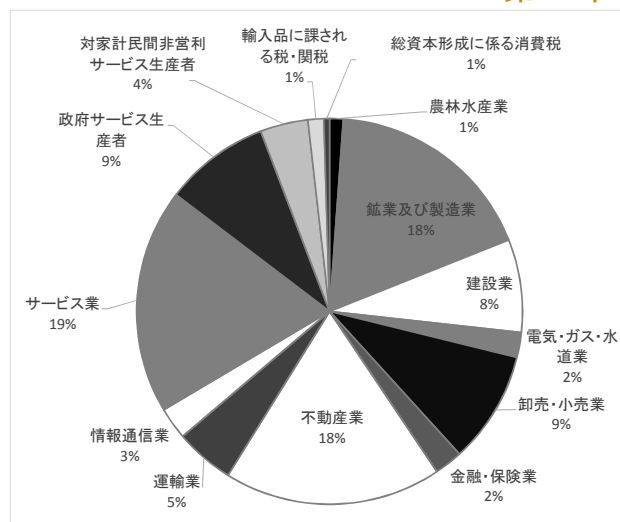


図1-6：経済活動別総生産（平成25年度）

出典：京都府企画統計課資料より作成

○農林業

亀岡市の農用地面積は2,000haを超えており、京都府内有数の規模を誇る。平成22（2010）年の農作物（耕種）別面積をみると、水稻が73.7%、次いで野菜が13.4%を占める。また亀岡市は京野菜の産地として、京都大納言小豆や馬路大納言小豆、賀茂なす、みず菜、紫ずきん、聖護院かぶ、聖護院だいこん、えびいも等の伝統的な京野菜を生産している。この他に、丹波松茸、犬甘野そば、丹波くり、亀岡牛などが、地域の特産物として知られている。

また、総農家数と経営耕地面積の推移をみると、ともに減少傾向にあることが分かる。一方で、川東地区で635haに及ぶ農地再編事業を行うなど、農地の集約化による作業の効率化と生産性の向上も進められている。

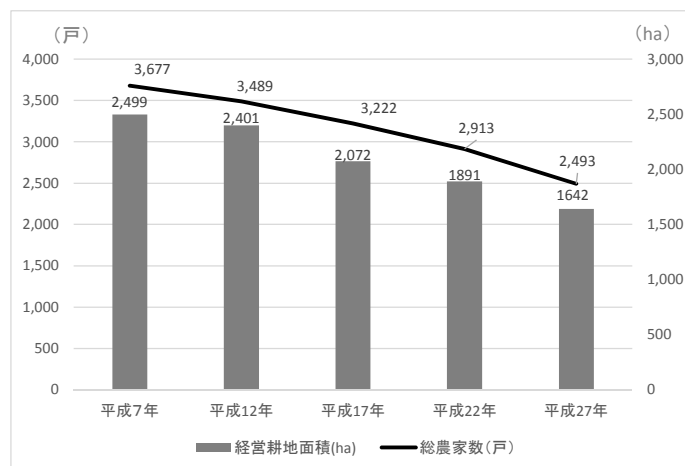


図1-7：総農家数と経営耕地面積の推移

出典：京都府統計書より作成 ※各年2月1日の値

3）観光動向

観光入込客数の推移を見ると、全体として増加しているが、日帰り観光が95%を占めており、滞在型観光の推進が今後の課題となっている。また、湯の花温泉、嵯峨野トロッコ列車、保津川下りが亀岡市の三大観光と位置付けられており、中でも嵯峨野トロッコ列車の利用者数は観光客入込数の4割以上を占める。

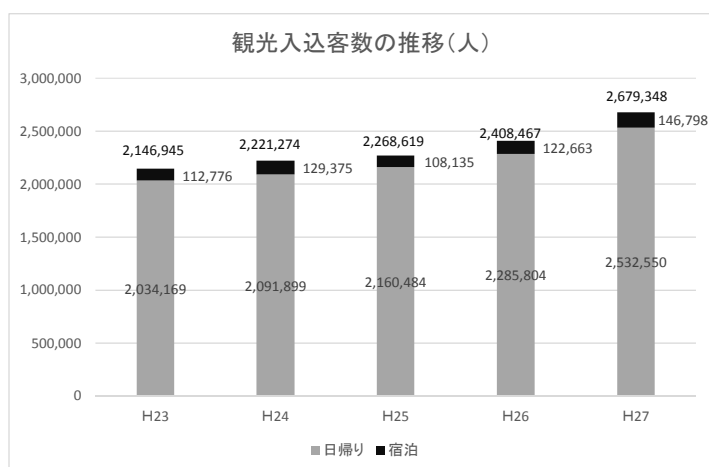


図1-8 観光客入込数の推移（日帰り・宿泊別）

出典：平成28年版亀岡市統計書より作成

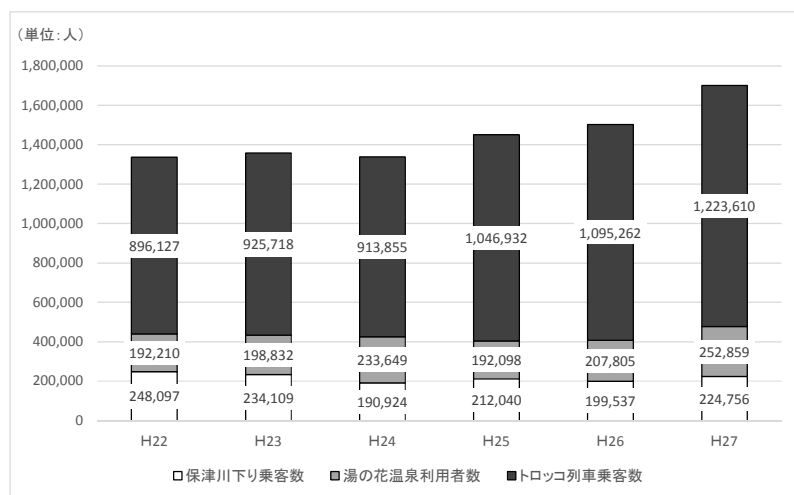


図1-9：嵯峨野トロッコ列車等の観光客入込数の推移



トロッコ列車と保津川下り

出典：平成28年版亀岡市統計書より作成

平成24年度亀岡市観光写真コンテスト受賞作品

(3) 市民の活動

市内では、天然記念物アユモドキの保全活動、市の名木めぐり、オープンガーデンかめおか等のイベント開催の他、食と農の関わりを学ぶ「かめおか農業塾」等の取り組みが進められている。

1) アユモドキの保全活動

かつて、アユモドキは琵琶湖淀川水系の河川の各所で見られたが、現在は、岡山県と亀岡市でしか見られない。アユモドキの減少要因としては、①治水対策の進捗などにより、産卵場所に適した一時的水域（氾濫原環境）の減少、②外来魚（オオクチバスやブルーギルなど）の侵入による食害、③農業の手法の変化や圃場整備、河川整備などによる生息環境の変化、が挙げられている。平成15（2003）年のアユモドキの絶滅危惧種指定を契機に、地域のNPOが生息調査を開始し、現在、専門家による検討委員会を設置してアユモドキの保全対策に取り組んでいる。農家や土地改良区の協力で、アユモドキの産卵適期に配慮したラバーダム（農業用堰）の立ち上げの呼び掛け、外来魚（オオクチバス、ブルーギル等）の駆除活動、アユモドキの飼育展示による普及啓発活動を実施している。



ラバーダム立ち上げ時の救出活動（6月）

出典：亀岡市資料

2) オープンガーデンかめおか

亀岡市では、年に1回、ガレリアかめおか芝生ひろばと、市内の園芸愛好家の庭を巡るツアーを開催している。当日は市内の庭園を紹介するガイドブックの販売、バラの相談会やバラ苗、園芸グッズの販売、押し花体験教室、コンサート等が開催される。



オープンガーデンかめおか
出典：亀岡市秘書広報課

3) 亀岡の名木めぐり

亀岡市では、市内に存在する樹木で、幾百年にわたる歳月を経て風格を漂わせている貴重な樹木128本を「亀岡の名木」として選定しており、先人の豊かな心により、長年にわたって守り継がれてきた名木古木、また、その土地の風土と歴史を市民に肌で感じてもらい、緑の保全の重要性を広めることを目的として「亀岡の名木めぐり」を開催している¹。



亀岡名木めぐり
出典：公益財団法人亀岡市都市緑花協会資料

4) 山野草を守る会

山野草及び自生地を調査研究し、これらの山野草の保護をととして生態系の確保を図り、単なる収集ではなく、移植培養等による種の保存に努めるため、研究会、展示会を開催している。さらに保津川のイワツツジの咲く景観を再生するために、苗づくりと補植活動が進められている。



岩ツツジの補植
出典：亀岡市秘書広報課

5) かめおか農業塾

亀岡市では、平成16（2004）年度より、地元農家の指導を受けながら、米作りや野菜作りを通して食と農の関わりを楽しく学ぶ「かめおか農業塾」を開講しており、市内在住を問わず応募が可能である。栽培できる品目は、米や京野菜（丹波黒豆の枝豆等）であり、参加者は5月から10月にかけて月1～2回の講座を受ける。なお卒業記念品は収穫した米（コシヒカリ・玄米5kg）や野菜となっている。



かめおか農業塾の活動
出典：亀岡市資料

6) そば打ち体験

標高400m近くに位置する犬甘野地区では、昼夜の気温差が大きく、そばの栽培に適している。「犬甘野風土館 季楽」では、地元の農事組合が手がけた打ち立ての「犬甘野そば」が提供され、そば打ち体験もできる。



犬甘野風土館 季楽
出典：農事組合法人犬甘野営農組合資料

¹ 公益財団法人亀岡市都市緑花協会資料

2 自然

(1) 気温・降水量等

亀岡盆地とその周辺地域は、気候区分の上では瀬戸内海気候域の縁辺にあたるが、内陸的な気候の特性をもつ。冬は冷え、夏も平均値ではそれほど高温ではないが、極値ではかなり厳しい暑さが現れる。風が弱く、霧の発生が多いことが特色である¹。亀岡市統計によれば、平成22(2010)年度から27(2015)年度の平均気温はおおむね14℃であり、総降水量は1,551～1,914mmで推移している。このような盆地の気温や降水量などの気象条件が、下の写真に示すような潤いのある亀岡の風景を生み出している。

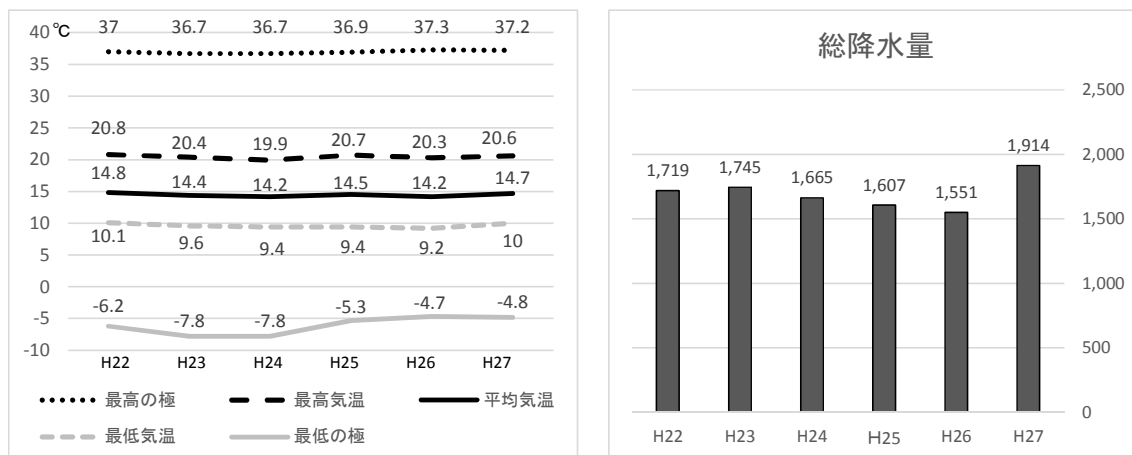


図1-10：亀岡市の平均気温（左）と総降水量（右）

出典：平成28年版亀岡市統計書（左）、平成23年～28年版亀岡市統計書（右）より作成



夜明けの吐息

平成27年度亀岡市観光写真コンテスト受賞作品



秋の鏡

平成27年度亀岡市観光写真コンテスト受賞作品

亀岡は 蓬莱島か 霧の海

「亀山は 蓬莱島か 霧の海」という句が江戸時代の俳人によって詠まれたと伝えられており、晩秋から冬にかけて深い霧が立ち込める亀岡の「丹波霧」が昔から有名であったことが伺われる。鍬山神社には、氏子であった奥田孕月が絵師村山松領に描かせた絵巻「矢田社奉納和歌(矢田八景)」が奉納されている(安政4(1857)年)。二宮景寄、大智院寛隆、亀山藩士、僧侶等24名の和歌とともに、「天岡夏雲」「社頭丹楓(鍬山神社の紅葉)」「大枝涼月(大江山の月)」「愛宕初雪」「保村婦鷺(保津川の白鷺)」「年山夜雨(千歳山)」「桂峯朝霞」「亀城秋霧」の八景が描かれており、ここでも霧の海に浮かぶ亀山城の美しさが取り上げられていることが分かる²。また、この絵は後世にも影響を及ぼしており、廣瀬桑田等の画家が模写を残している³。

亀岡での霧の月ごとの発生回数のデータを見ると、10月から1月の霧の発生回数が多く、晩秋から冬にかけて発

¹ 日本地誌研究所(編)(1973)「日本地誌第14巻 京都府・兵庫県」

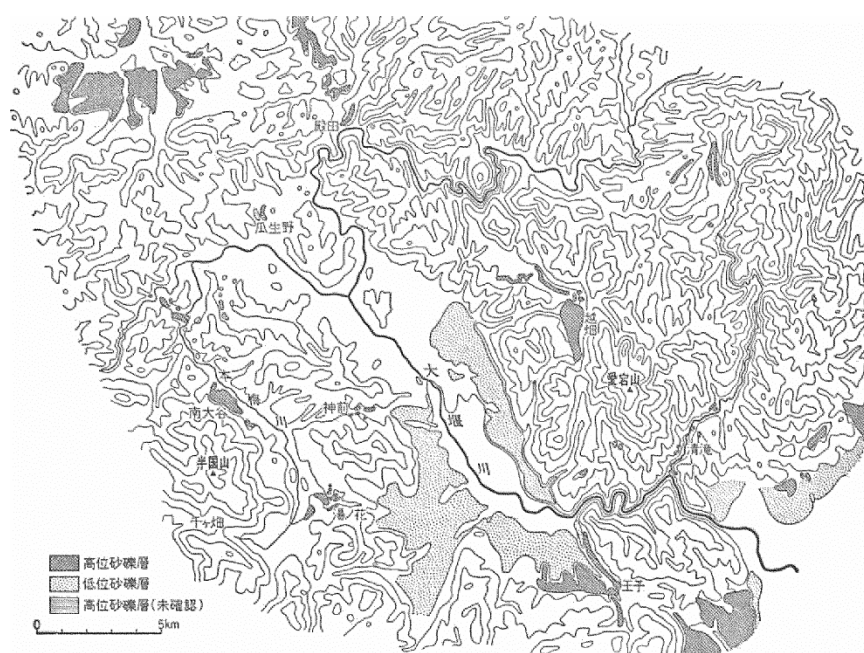
² 亀岡市文化資料館(2013)「丹波亀岡・風景へのまなざし」

³ 亀岡市文化資料館(2013)「丹波亀岡・風景へのまなざし」

生する丹波霧が裏付けられる。一方で、1950年からの年ごとの霧の合計発生回数を比べると1980年以降、年間50回以上発生したことはなく、乾燥化の傾向があることが分かる(京都府農林水産センター提供)。「京都府の気象 平成26年年報」による、濃霧注意報の発表回数を京都・亀岡地域で比較すると、特に11月から1月にかけて亀岡市でのみ8回以上の注意報が発表されており、歴史的に霧の名所であった所以が伺われる。また、京都市や隣接する市域では、霧の発生が少ない、もしくは濃霧注意報が発生するほど霧が濃くなることは稀であることから、「霧」は亀岡市外の人々に「幻想的な非日常感」を体験させる観光資源に成り得ると期待できる。

(2) 地形・地質・土地利用

亀岡市は、京都府中西部の亀岡盆地及び周辺山地に位置する。亀岡盆地は、若丹山地と摂丹山地の境界線沿いに、北西—南東方向の長軸を持つ盆地であり、東側は比高500mの直線状の崖で限られているのに対して、西側は古生界や花崗岩の山地が岬上に突き出ており、東西断面は非対称で、形動による断層角盆地のようにみえる。亀岡盆地の南東部には、鮮新更新統からなる丘陵がみられる。また盆地の南半分は、かつて湛水して古亀岡湖を形成したとされる堆積面が段丘面となって残っている。盆地の東の崖麓には扇状地が複合しており、三俣川などには天井川がみられる。桂川(大堰川)沿いには氾濫原が広がる。盆地の出口の保津峡が排水難であるために、氾濫原上で桂川(大堰川)のいくつかの流路の変遷を追跡でき、現在でも洪水のたびに湛水氾濫を繰り返している¹。主な山岳としては、摂丹山地に属する半国山(標高774.2m)や横尾山(同784.9m)がある。



亀岡盆地と保津峡の地形と砂礫層
(水山高幸1955: 亀岡盆地周辺の砂礫層の堆積と地形発達との関係「京都学芸大学学報 A-6」による)

図1-11: 亀岡盆地と保津峡の地形と砂礫層

出典: 日本地誌研究所(編)(1973)「日本地誌第14巻 京都府・兵庫県」

¹ 日本地誌研究所(編)(1973)「日本地誌第14巻 京都府・兵庫県」

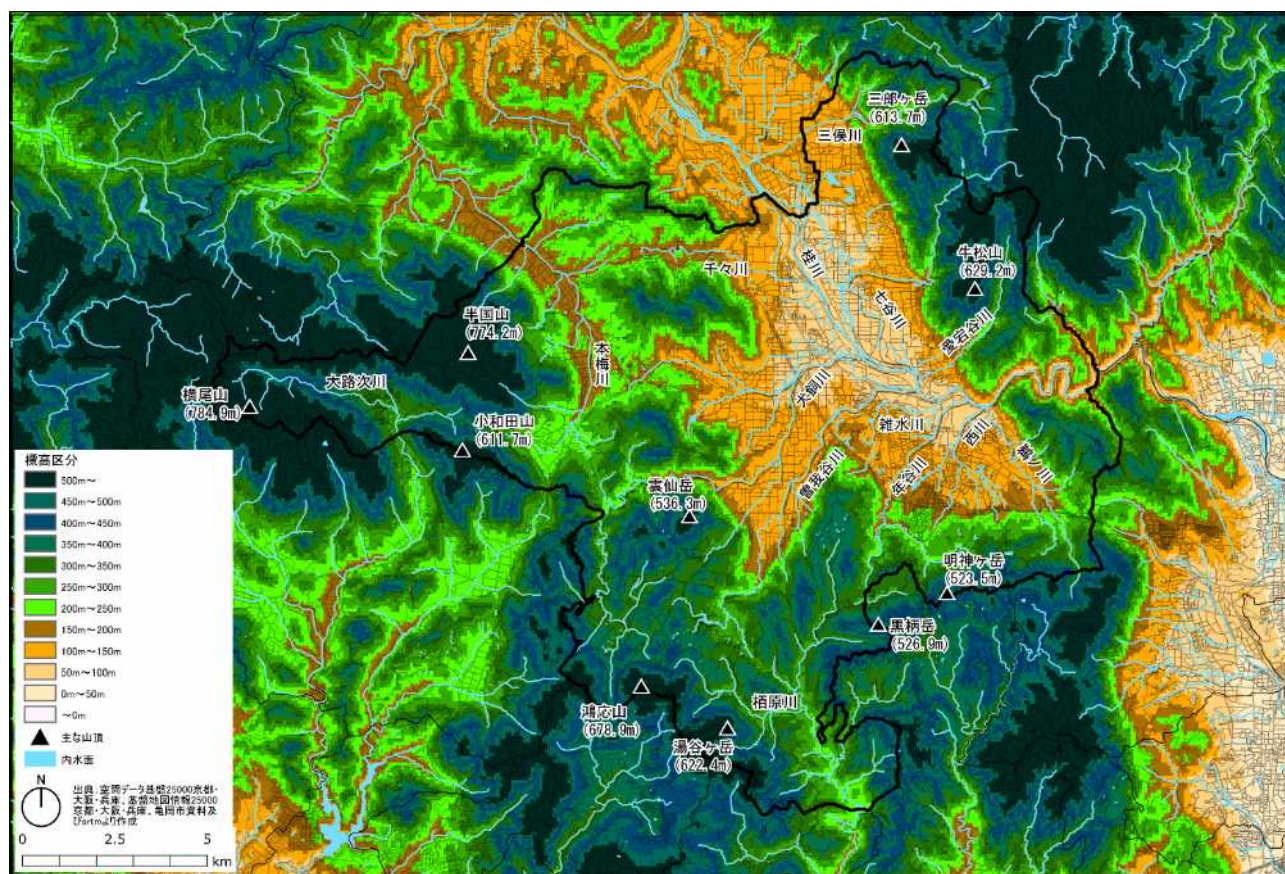


図 1-12：主な山岳と標高区分

出典：空間データ基盤 25000 京都・大阪・兵庫、基盤地図情報 25000 京都・大阪・兵庫、亀岡市資料及び SRTM（スペースシャトル地形データ）より作成



龜岡盆地

出典：亀岡の自然 100 選



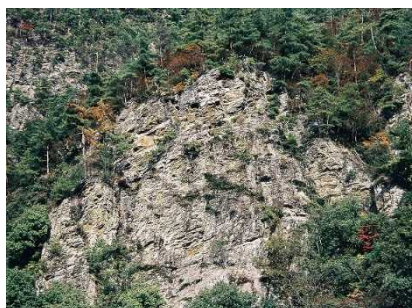
牛松山（丹波富士）

出典：亀岡の自然 100 選



保津峡谷

出典：亀岡の自然 100 選



三俣溪谷・チャートの崖

出典：亀岡の自然 100 選

第1章

亀岡市の地目別土地面積をみると、山林が 52.0%と最も多くを占め、次いで田(29.3%)、宅地(11.7%)となっている。

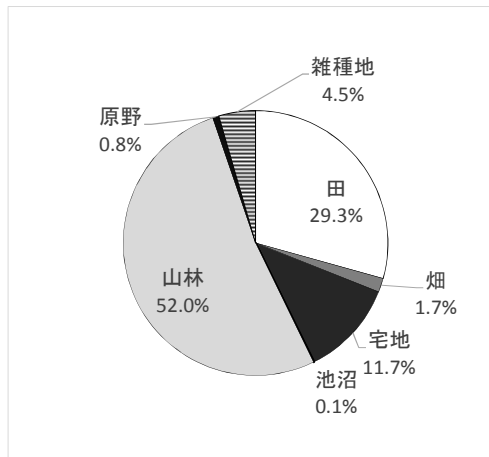


図 1-13 : 地目別土地面積 (平成 27 年 1 月 1 日現在)

出典 : 亀岡市統計書より作成

秋の山里

平成 25 年度亀岡市観光写真コンテスト受賞作品

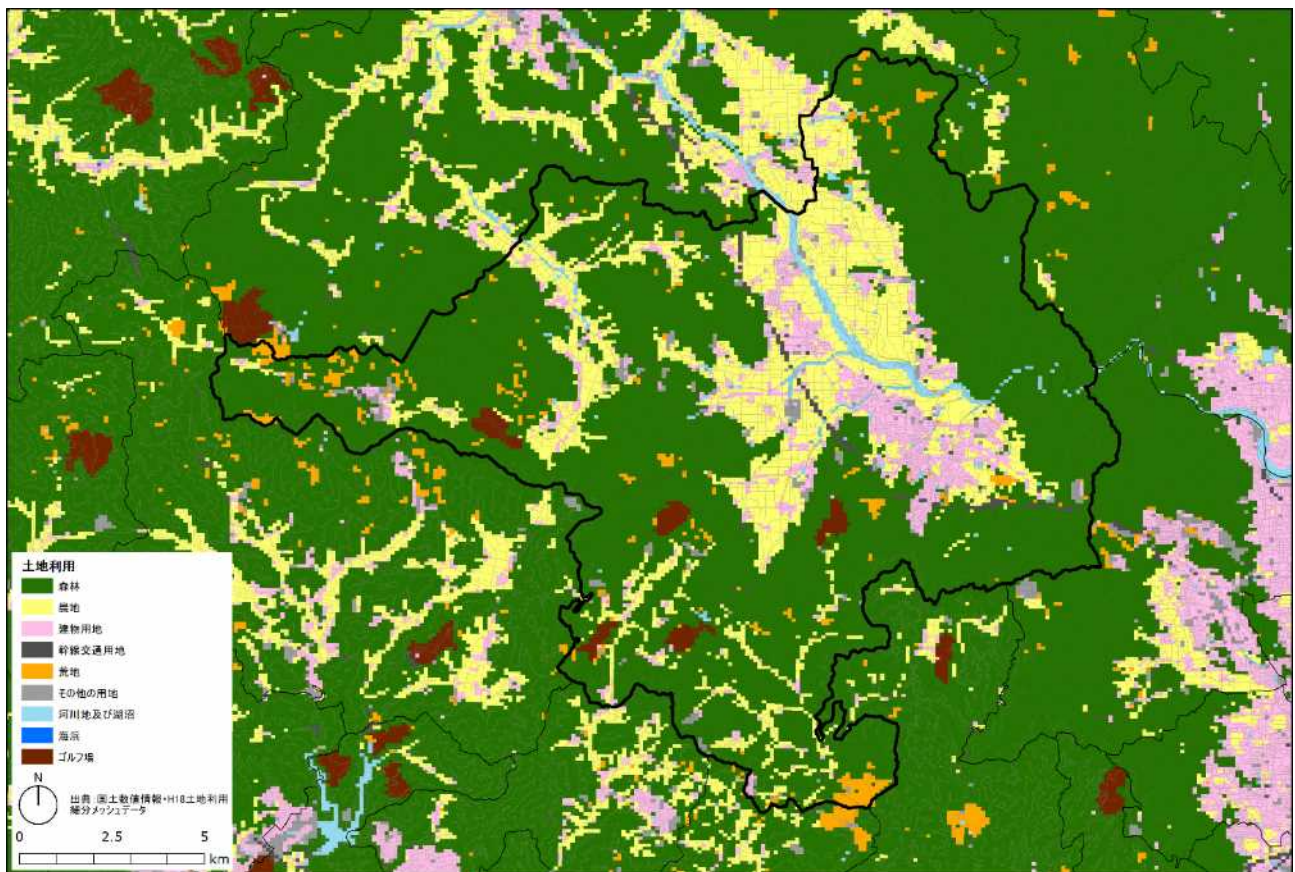


図 1-14 : 土地利用区分

出典 : 国土数値情報 [H18 土地利用細分メッシュデータ] より作成

(3) 水系

亀岡市の流域は、淀川水系の猪名川流域、桂川流域、安威川流域に3分される。市域の西端が猪名川水系の一庫・大路次川流域である。淀川水系は1次支川である桂川を中心に流域が形成されている。亀岡盆地で桂川右岸に合流する流域としては、北部から千々川流域、犬飼川流域（杉原川、山内川、法貴谷川）、曾我谷川流域、雑水川流域、年谷川流域、西川流域、鶉ノ川流域に区分される。亀岡盆地で桂川左岸に合流する流域としては、北部から官山川流域（三俣川）、七谷川流域（古川）愛宕谷川流域に区分される。また、南丹市で桂川に合流する園部川流域の本梅川は音羽川、八田川と合流しながら、市域を北流し園部川と合流する。この本梅川の中流域は小盆地を形成しており、七谷川流域と同様、氾濫原の生物が見られる希少な流域である。市域南部は淀川水系の1次支川である安威川流域（栢原川、東掛川）である。

市域の大部分は桂川水系が占めるが、流域により性質が異なっている。例えば、流域面積が大きく砂礫河原が発達する犬飼川流域、氾濫原の緩流河川である七谷川流域、その中間に位置する曾我谷川流域と概観することができ、生育・生息する生物も異なっている。これら多様な流域が亀岡市の自然環境の基盤となっている。

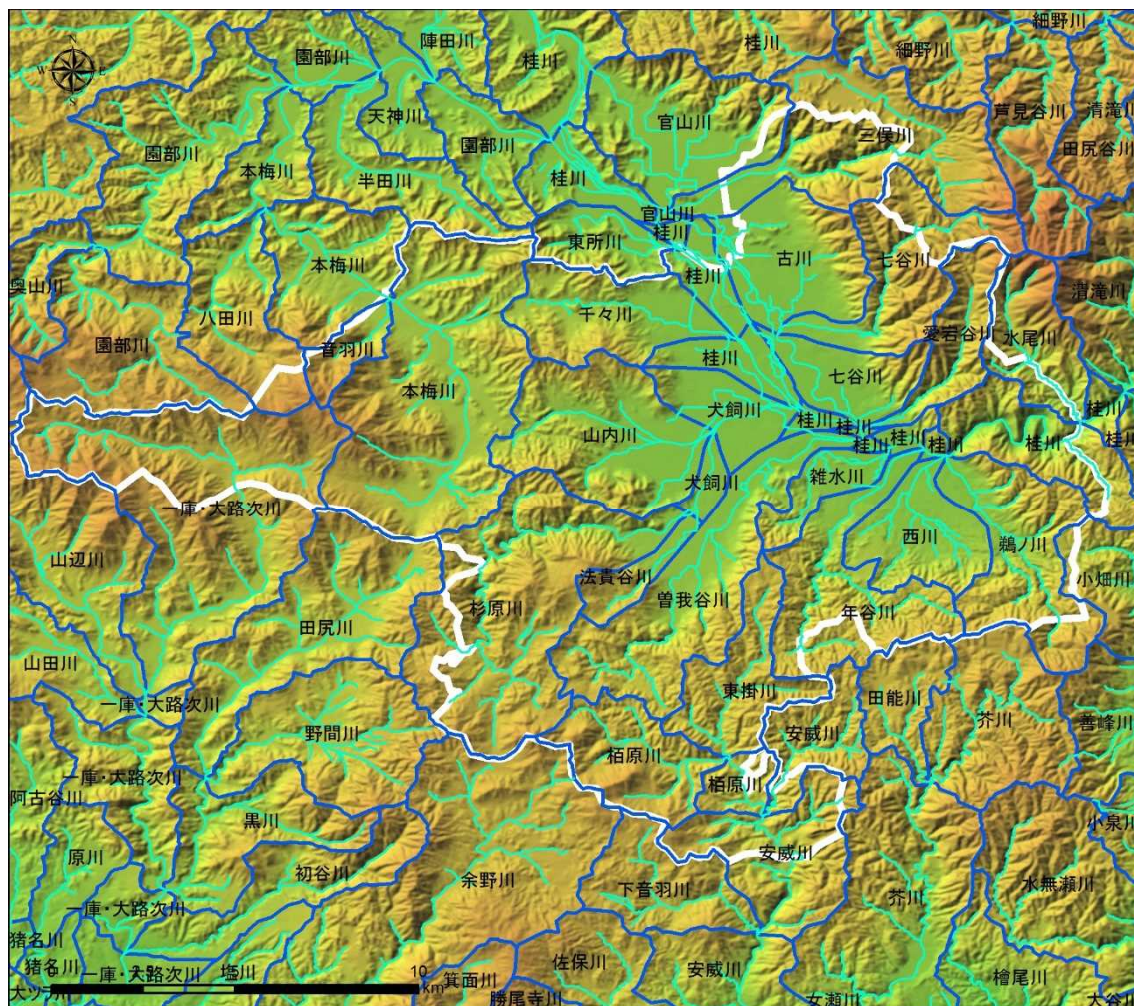


図1-15：水系区分

(4) 植生・生態系等

亀岡市の植生をみると、市街地及び農地を除くほとんどの部分が、モチツツジ・アカマツ群集やアベマキ・コナラ群集等に代表されるヤブツバキクラス域の代償植生となっている。湿潤な山地の斜面中部から下部には、アベマキ、コナラ等の落葉広葉樹が、より上部の斜面や乾燥した尾根筋にはアカマツなどの常緑針葉樹が優占する。また桂川をはじめとする河川周辺には、ヨシクラスやツルヨシ群集などの草本群落から、ヤナギ林等の樹林や、竹林が分布している。

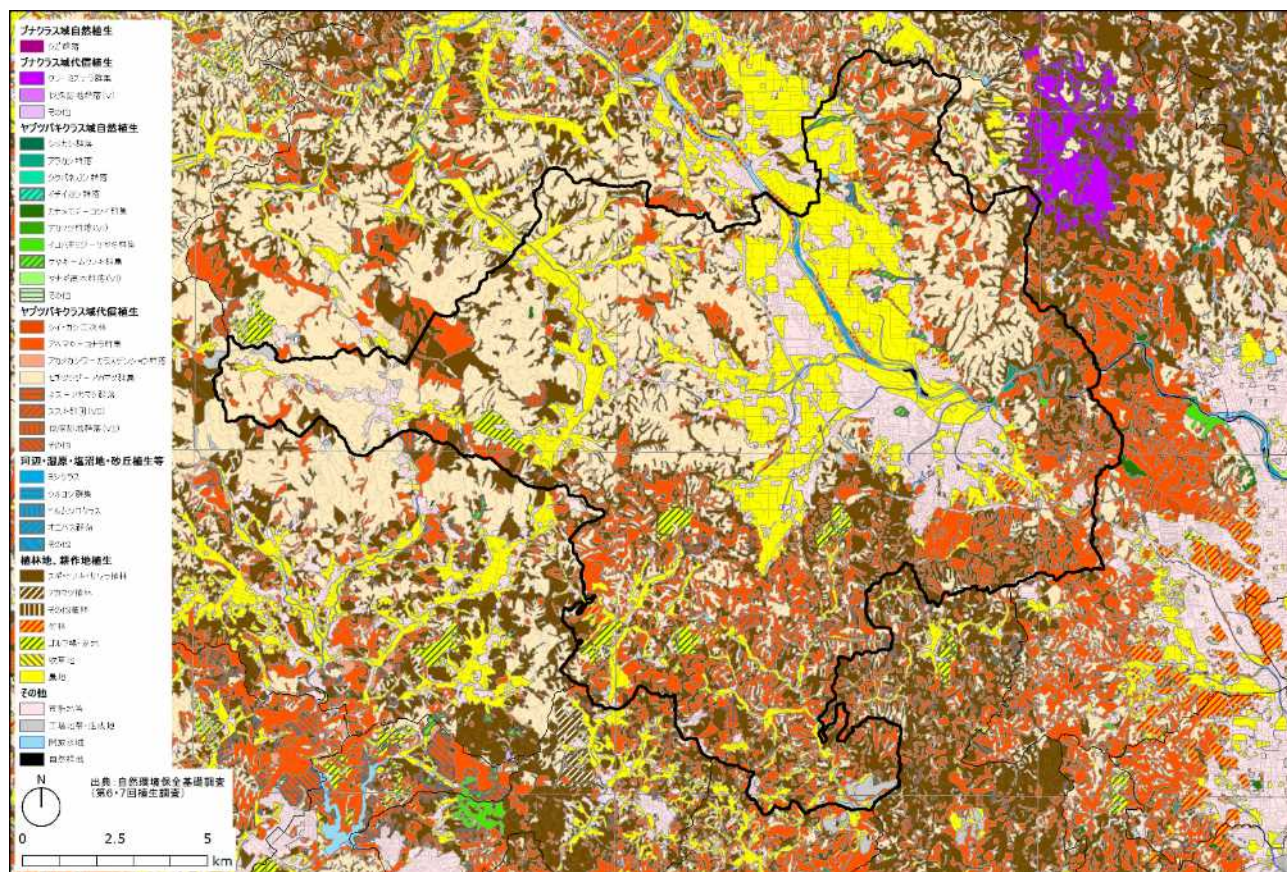
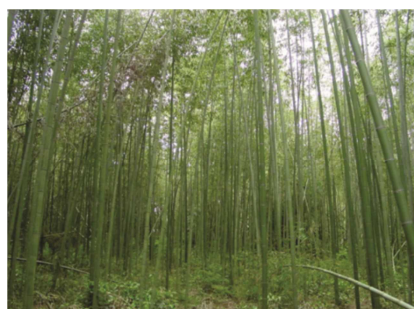
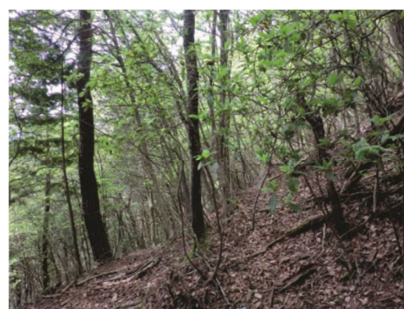


図1-16：植生区分

出典：自然環境保全基礎調査（第6・7回植生調査）より作成



竹林



アベマキ・コナラ林

出典：亀岡市教育委員会（2016）「保津川船下りの文化的景観保存調査報告書」

第1章

貴重な種の生息状況を見ると、重要種としてミズニラやオニバス、ミズワラビ等 47 種の生息が確認されている（平成 23 年度調査¹）。これらの種には、谷沿いや水田の畦、河川敷など比較的湿潤な環境に適応する種が多い。また絶滅危惧種のオニバス²は、府内では平の沢池でしか生息を確認できない。市内の河川には、国の天然記念物であり、種の保存法に基づく国内希少野生動植物に指定されているアユモドキや、オオサンショウウオ、ホタル等、多様な水生生物が生息している。重要種としては、アカザ、アユモドキ、ヤリタナゴ等 12 種が確認されている（平成 22 年度調査³）。こうした希少種だけでなく、都市化の進行に伴い、これまで身近に観察されたホタルやメダカなども減少している。

またコケの生息種確認調査（平成 28 年度調査⁴）では、絶滅危惧種として、ヤワラゼニゴケ（環境省 RDB／京都府 RDB）、チャボサヤゴケ（京都府 RDB）の 2 種が確認された。今後、時間をかけた調査を行うことで、より多くの貴重な種が発見される可能性がある。また寺社仏閣の境内・石垣には、典型的な日本庭園で使用されている種（コバノチョウチンゴケなど）が自生していることが分かった。



重要種であるミズニラ（左）とオニバス（右）

アユモドキ（平井智法氏撮影）

出典：亀岡市「植物等調査業務報告書」（平成 23 年 12 月）、亀岡市資料

一方、亀岡市内ではアライグマやヌートリア、オオクチバス、ブルーギル、ウシガエル等の外来種が目撃されており、在来種への影響が懸念されている。植物でもアレチウリ、オオカワヂシャ、オオキンケイギク、ナルトサワギク等の特定外来生物が確認された⁵。



外来生物のアレチウリ（左）・オオカワヂシャ（右）

出典：亀岡市「植物等調査業務報告書」（平成 23 年 12 月）

（5）巨樹・巨木

環境省が実施した調査⁶では、巨樹・巨木林として 18 個体が報告されており、樹種別ではケヤキ（4

¹ 亀岡市「植物等調査業務報告書」（平成 23 年 12 月）

² 環境省カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ種、京都府カテゴリ：絶滅寸前種。一年性の水生植物で、池沼の埋め立てと水質の悪化で消滅する産地が相次ぎ、現在は限られた少数の場所にしか残っていない。（出典：京都府レッドデータブック 2015）

³ 亀岡市「平成 22 年度水生生物調査業務調査結果報告書」

⁴ 市内 12 カ所において、コケの生息種を確認する予備調査を実施（専門知識を要する同定は福井県立大学の石善隆氏に依頼）。公園及び寺社仏閣の境内において、コケ被覆面積が視覚的に広い場所を選出。

⁵ 亀岡市「植物等調査業務報告書」（平成 23 年 12 月）

⁶ 自然環境保全基礎調査（巨樹・巨木林調査）の結果は「巨樹・巨木林データベース」で公開されている。

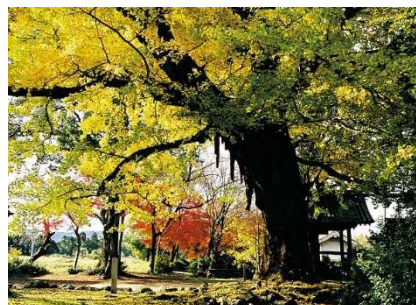
第1章

本)、スギ(4本)、カヤ(2本)等がある。また18個体中の8個体は信仰対象となっており、注連縄が巻かれる、あるいは社・祠を伴っている。また平成26年度より、準名木の調査に取り組んでおり、これまでに229本の樹木¹について調査報告がまとめられている。



桂川袂(旧亀岡商工会館北)のサイカチ

出典：亀岡の自然100選



国分寺のイチョウ

出典：亀岡の自然100選



南郷池のエノキ



王子神社のツブラジイ

表1-1：市内の巨樹・巨木林

樹種名	幹周(主幹)(cm)	樹高(m)	所有者	社寺名	信仰	備考
ヤマザクラ	300	16	社寺	小幡神社	無	
ムクノキ	490	15	社寺	穴太寺	無	府指定天然記念物
センダン	440	23	個人		無	
スギ	530	31	社寺	天満宮	有	
ケヤキ	520	13	個人		有	
スダジイ	470	17	社寺	与能神社	有	
カヤ	380	20	個人		無	
スギ	470	34	社寺	素戔神社	有	
ツクバネガシ	630	12	個人		有	
クロマツ	300	14	個人		無	
スギ	724	34	社寺	大内神社	有	
ケヤキ	522	28	社寺	梅田神社	無	
ケヤキ	483	25	社寺	日吉神社	有	
イチョウ	416	24	社寺	国分寺	有	市指定天然記念物
スギ	510	20	社寺	阿多吉神社	有	
クスノキ	420	17	社寺	八幡神社	無	
サイカチ	340	13	不明		無	
カヤ	400	20	個人		有	

注) 調査年はいずれも昭和63(1988)年。 出典：巨樹・巨木林データベースより作成

¹ 亀岡市「準名木の調査報告書」

3 歴史文化

(1) 歴史文化の特徴

1) 概略

古代、現在の亀岡盆地は湖（亀岡湖）を形成していたといわれている。すでに縄文時代には人の生活があり、弥生時代には稲作耕作も発達していた。この頃、大陸から日本海側の丹後文化圏に到達した人々は、標高の低い丹波山地を越えて京都盆地に至っていたともいわれるが、その場合には亀岡盆地は大阪湾や奈良盆地につながる重要な経路であった。桂川兩岸の比高地には、千歳車塚古墳のような古墳や祭祀跡の遺跡が散見される。

奈良時代には丹波国の中心地として桂川左岸河岸段丘上に丹波国分僧寺と国分尼寺がおかれた。奈良時代にはこの地域を山陰道が通っていたとされ、当時の古道と考えられる道が断片的に伝えられている。桂川右岸では市内中心部から西部にかけて条里道構が広く残っている。なお、千代川に国府があったという説もある。市内には起源を10世紀以前のものとされる長い歴史を持つ寺社が数多く所在する。戦国時代末期には織田信長の命を受けた明智光秀の支配下となり、豊臣秀吉が亀山城を接収して以後江戸時代までに、独特の空間構造を持った亀山の城下町が形成されたといわれ、江戸時代を通じて城下町として栄えた。

亀岡市では、丹波亀山城下のみならず様々な地域で独特の文化が育まれており、関係する人物としては、源頼政、足利尊氏、内藤ジョアン、明智光秀、石田梅岩、円山応挙、三輪田眞佐子、出口王仁三郎などの歴史的人物が挙げられる。

明治2年の版籍奉還により丹波亀山藩から亀岡藩となり、後に廃藩置県で亀岡県となった。そして、1町100村近い集落が定められ、南桑田郡となった。南桑田郡内ではその後も合併や分離が繰り返され、昭和30(1955)年の1町15村の大合併によって亀岡市が誕生し、他村との合併を経て、昭和34(1959)年の篠村合併によって現在の市域が形成された。



丹波亀山城天守古写真

出典：亀岡市文化資料館（美田村顕教撮影）



丹波亀山城図

出典：四国中央市教育委員会所蔵

2) 市域を理解するための歴史的背景

村の分布状況は、幕末から明治時代初期に至る過程でどのような変遷があったのかを知ることができる。廃藩置県に際しては、周辺部において隣接する他藩領との間で地域の入替わり等が認められたが、旧亀山藩を中心とする地域の大半は最終的に南桑田郡となった。

南桑田郡に分布する各村で数的に中心となるのは、亀山藩領であった1町49村であり、桂川右岸では亀岡町と篠村の全域、東別院村・曾我部村・葺田野村・本梅村・宮前村・千代川村の半分程度が、桂川左岸では保津村のすべて、旭村の大半、千歳村と河原林村の一部が含まれる。旧亀山藩領にはこれ以

外に檜田村もあったが、この村は現在大阪府高槻市に属している。

次いで広い面積を占めていたのは幕府旗本領（直轄領）で17村あった。現在の市域の北側を中心に、左岸では馬路村の大半と河原林村と千歳村の半分程度が、右岸では千代川村と蕨田野村の半分程度、宮前村・本梅村・大井村・曾我部村の一部に存在した。西別院村の一部にも存在したが、現在は大阪府豊能郡に属している。幕府領及び亀山藩領が入り交じっていたと考えられる村も吉川村の全域と千代川村・大井村・千歳村にあり、一つの村の中にも複雑な社会状況にあった可能性が示唆される。

さらには、摂津高槻藩に属する13村があり、西別院村のほぼ全てと東別院村の多くの部分及び曾我部村の南半が含まれていた。これらの村々は摂津の文化圏に属していた地域であると考えられる。

以上のほかには、園部藩領、篠山藩領と両藩の旗本領があったが村数は多くなく、文化的な特徴を見せている可能性はそれほど大きくない。一方、旧村数はわずか3村であるが、畿内一円に多く分布した元御除料(天皇領)が大井村と畑野村の半分程度を占めていた点は特徴として挙げられる。

このように、亀岡市内に様々な支配体制が混在していたことが、地域ごとの多様な文化や風習を育む土壌となっているといえる。



旧千代川村（幕府旗本領）の畦畔木



旧篠村山本（亀山藩領）の町並み



旧千歳村毘沙門（幕府旗本領）のへき亭（武家屋敷）



旧畑野村千ヶ畑（旧御除料）の法常寺

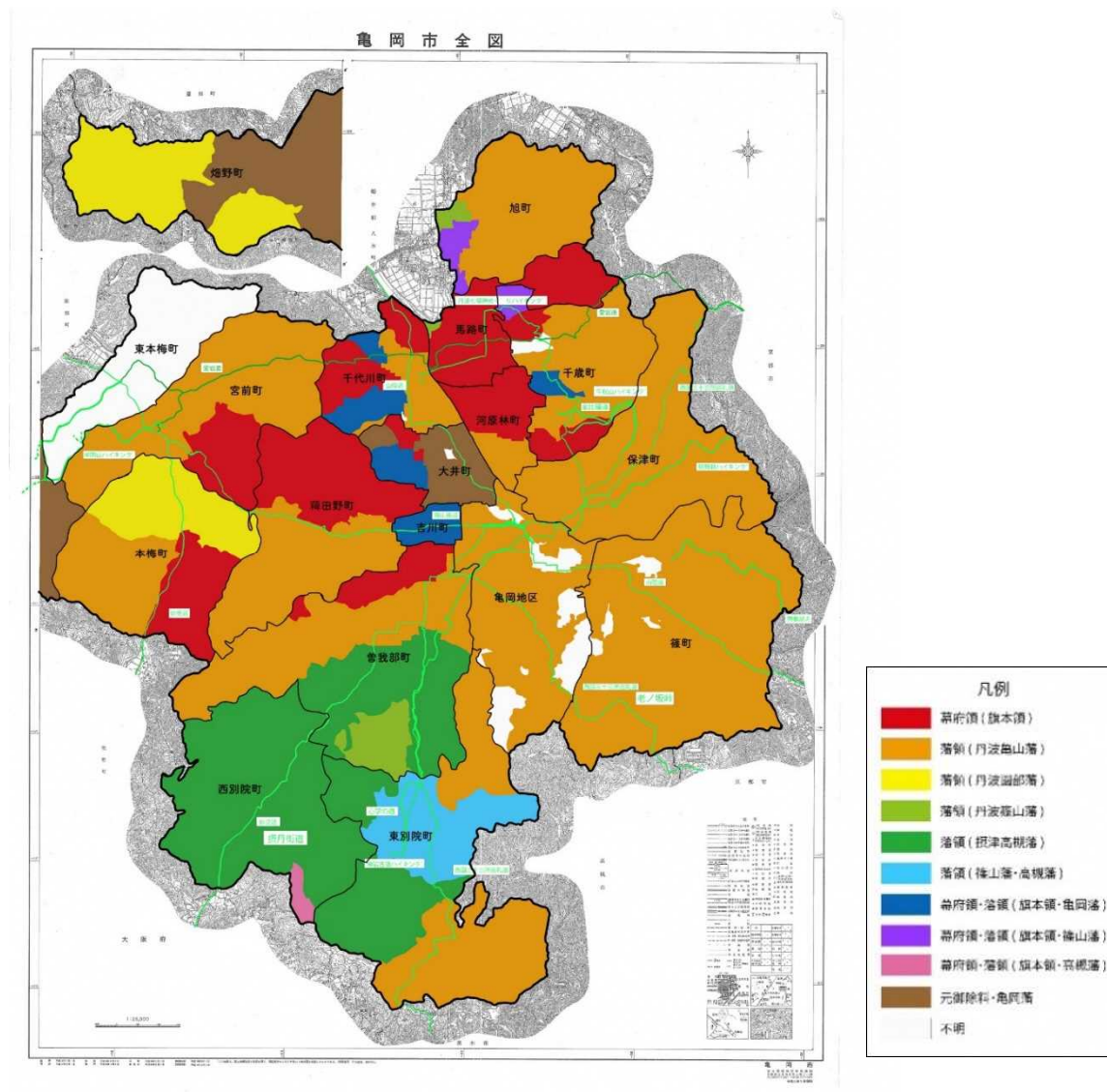


図1-17：亀岡市域の支配体制と古道

山陰道がつかない文化

山陰道の入り口に位置する亀岡は、京と山陰ハヶ国を結ぶ交通の要所であり、亀岡を通る山陰道も時代と町の発展に合わせてルートを変えてきた。奈良時代には、篠町馬堀より保津町・千歳町・旭町のルート、平安時代には篠町・吉川町・蔦田野町・東本梅町・宮前町を通っていた。中世には、亀岡から北西に向かう篠山街道「丹波路」(現在の国道372号線に近い)もすでに整備されており、平氏が1184年に京の奪還をかけて進撃した際、源義経の軍が老ノ坂からここを抜けていったとされる。また一の谷(鶴越)へ向かう義経一行の辿ったとされる道には、休息したとされる腰掛け岩(蔦田野町)、那須与一が病気を治したとされる那須与一堂などが残る。

城下町の整備後は、城下町を通る山陰道のルートの記録が残っている。城下町の主要な入り口は5つあり、京都から城下町に入る「京口」、篠山方面からの城下町への入り口である「篠山口」、穴太寺方面に向かう「穴太口」、丹後へとつながる「丹後口」、安町にあり旅人が湧水で喉を潤したとされる「清水口」である。また、山陰道に関する道標が現在でも数多く残されている。特に河原町は、山陰道、西国巡礼道、篠山街道の交差点にあり交通の要所であったことが読み取れる。

(2) 文化財や歴史的文化的資源

亀岡市の文化財指定件数は、平成 29 (2017) 年 4 月 26 日現在、国指定・登録 29 件、京都府指定・登録及び環境保全地区 41 件、市指定 53 件である。国指定文化財としては、「丹波国分寺跡附八幡神社跡」や、丹波之国一ノ宮であり、雨乞い行事「出雲風流花踊」が奉納される「出雲大神宮本殿（建造物）」、菅原道真公ゆかりで通称「桜石」と呼ばれる「堇青石仮晶（きんせいせきかしょう、天然記念物）」などがある。

表 1-2 : 文化財等指定・登録件数一覧

国指定・登録文化財					京都府指定・登録文化財及び環境保全地区					亀岡市指定文化財							
種別			指定	登録	種別			指定	登録	種別			指定				
有形文化財	建造物		7	1	有形文化財	建造物		7	6	有形文化財	建造物		9				
	美術工芸品	絵画	4	0		美術工芸品	絵画	2	0		美術工芸品	絵画	4				
		彫刻	8	0			彫刻	3	0			彫刻	17				
		書跡・典籍	2	0				工芸品	2				2	工芸品	4		
記念物	史跡		2	0	民俗文化財	有形民俗文化財	古文書	2	0	記念物	史跡	考古資料	1				
	天然記念物		3	0			歴史資料	3	0			書籍・典籍	1				
民俗文化財	有形民俗文化財		0	1			民俗文化財	無形民俗文化財				0	1	民俗文化財	天然記念物		5
	無形民俗文化財		1	0				民俗文化財	無形民俗文化財			1	3		民俗文化財	有形民俗文化財	
計		27		2	環境保全地区						無形民俗文化財		2				
					記念物		名勝	3	1	計		53					
					計			30	13								

※平成 30 年 2 月 22 日現在

出典：亀岡市内の指定・登録等文化財一覧より作成



出雲風流花踊

平成 25 年度亀岡市観光写真コンテスト受賞作品



堇青石仮晶（桜石）

出典：亀岡市HP



愛宕神社本殿

出典：亀岡市観光協会

亀岡市の主な社寺としては、丹波之国一ノ宮であり、大国主命、三穂津姫命の二柱を祀り、縁結びの神としても知られる「出雲大神宮」や、丹波七福神の札所である「耕雲寺」、「金光寺」、「神応寺」等がある。「愛宕神社」は、火防の神を祀り、毎年 4 月 24 日には鎮火祭が行われる。「篠村八幡宮」は、足利尊氏が打倒鎌倉幕府を目指し、挙兵をした地であることで知られている。

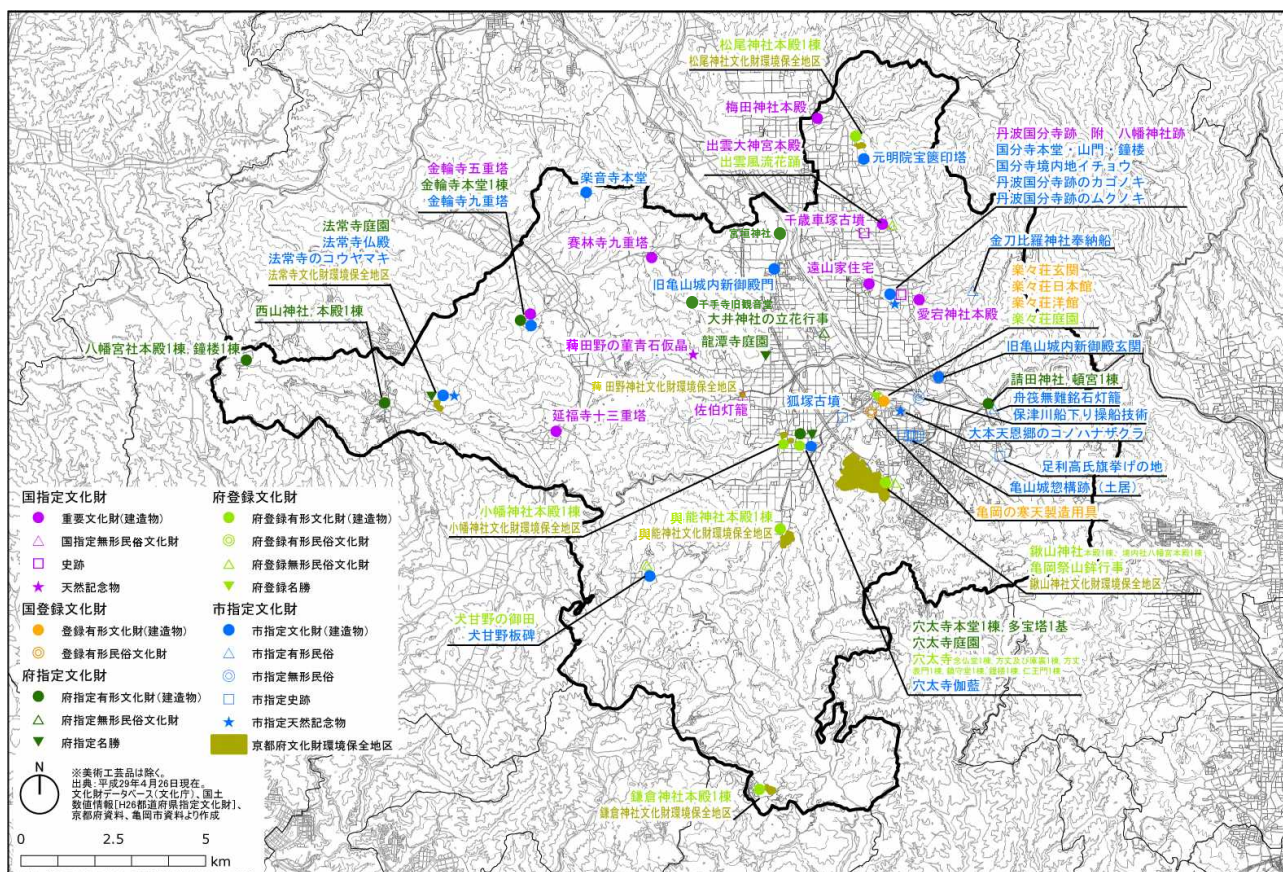


図1-18：指定文化財・登録文化財の分布

出典：文化財データベース（文化庁）、国土数値情報 [H26 都道府県指定文化財]、京都府資料、亀岡市資料より作成

4 暮らし

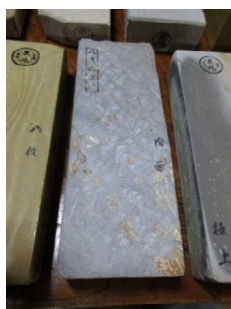
(1) 伝統的な技や匠

1) 砥石・庭石

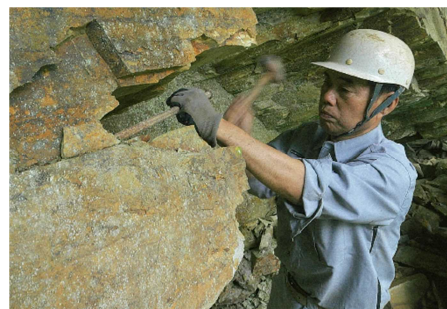
江戸時代の文献に記録が残る「野鍛冶」、日本では数少ない仕上げ砥石の産地として、明治期から採掘と加工を続ける砥石業がある。亀岡市東本梅町、宮前町神前の地域は、現在でも天然砥石の貴重な産地の一つであり、日本刀の仕上げ研ぎに必要な「内曇（うちぐもり）」を採掘しており、日本刀文化の保全・継承を支える上で重要な地となっている。近年、日本刀を製造する鍛冶場が開設されている。また市内では、庭石として重宝された丹波鞍馬石も採掘されてきた。



天然砥石のサンプル



日本刀の仕上げ研ぎに使用される「内曇」



丸尾山での採掘

出典：市制 60 周年記念亀岡市勢要覧

2) 竹細工・京藍

亀岡市では、丹波竹を用いた「竹細工」も盛んであり、特に千歳町毘沙門は、江戸時代には名の知れた竹籠の産地で、昭和に入るところまで生産されていた¹。

また、かつては盛んであった「京藍」の技術を復活させる取組みが始められている。「ほづあい研究所」は藍染の良さを広めたいと活動している研究所で、保津川近くに位置する。地域住民の協力のもと、藍を栽培しており、現在 600 坪の藍畑が存在する。藍染体験や藍染の作品展の開催、藍を使った製品の地域ブランド化など、染色以外にも、飲食や栽培など広い視野で、亀岡から藍を広める試みを行っている。



保津藍を使用した藍染め



ほづあい研究所

出典：亀岡市資料

3) 操船道具

船頭は、操船のために必要な道具を自身の手でつくる。川底や岸壁を突く棹、櫂と船をつなぐ櫂紐、舵棒と船をつなぐ舵緒の3つの道具が揃って初めて1隻の船を操ることができる。周辺の山林や竹林から棹に使う竹、棹の先に使うサヤゴ（ソヨゴ）、舵緒に使う檜や樫、棕櫚の幼木などを採る場所として、

¹ 丹波竹は、肉厚で茎の繊維がよくしまっていて粘りがあり、割り剥ぎしやすく竹細工に最適だった。江戸時代中期、保津村の浪人が竹籠を編み生活を営んでいるのを村人がみて、教えを受けたのが竹細工の始まりとされる。出典：亀岡市教育委員会（2016）「保津川船下りの文化的景観保存調査報告書」

船頭にとって山は川仕事に欠かせない場である。船で使う道具類は、昔ながらの素材と方法で船頭が製作し、その製作技術は操船技術とともに船頭仲間の間で受け継がれている。



棹尻のサヤゴ（ソヨゴ）（山本）



櫓紐の制作



舵緒の制作（保津）

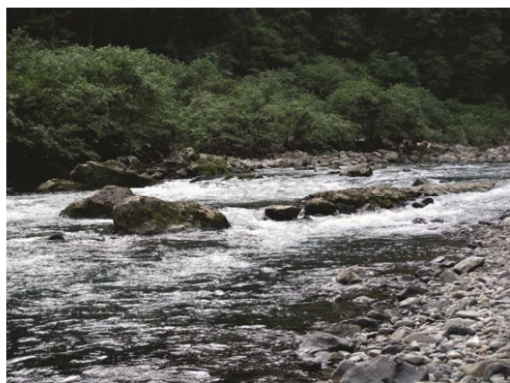
出典：亀岡市教育委員会（2016）「保津川船下りの文化的景観保存調査報告書」

4）保津川にみる水寄せと川作

保津川では水深の浅い瀬には、船を安全に下すために石積みの構造物が築かれている。慶長 11(1606)年、角倉了以により保津川の開削工事が行われ、これによって舟運が可能となった。石積みの機能は、①水の流れの方向を変える、②川幅を狭くすることで水深を確保する、の2つに分けられ、船頭はこれらの石積みを、「水寄せ」「ミズバネ」「イシバネ」「イシバリ」とさまざまな呼び方をしている。

船の水路には一定の水深が必要であり、浅い瀬などでは、川の水が集まるように流れを誘導し、水深を確保しなければならない。保津川の船は高瀬舟型の喫水の浅いもので航行には 50cm 以上の水深が必要である。大きく流れが湾曲する朝日ヶ瀬から孫六岩の間には、自然の岩の配置をうまく使いながら、長さ 30～50mの水寄せが5基築かれている。水寄せは通常の水量の時はその役割を果たし、増水時には水が自然に石積みを越え、必要な水深が自然に確保される仕組みになっており、現代の水制を考える上で学ぶべき点が多い。また、下向き水制の下流には淵が形成される。淵は内膳淵と呼ばれ、かつては筏の組み替えや船溜まりとして利用されるなど、内膳堤は水寄せの機能のみならず、水運と深く関わる構造物といえる。

沈床から発展した構造物である水寄せは構造上、壊れやすく、多くはコンクリートや矢板で補修、補強されている。こうした補修作業は船頭が行い、これを川作と呼んでいる。なお船頭は2年間の研修を修了してからではないと、川作への参加の許可が下りない。船長など年輩の船頭も川作に参加することはない。年輩船頭の場合、体力的な理由に因るが、特に川作への参加についての規則はなく、個人の判断によって任せられている。このように、保津川の船下りの航路は船頭の手による川作と呼ばれる作業によって、維持されている。



朝日ヶ瀬の水寄せ



水寄せの修理

出典：亀岡市教育委員会（2016）「保津川船下りの文化的景観保存調査報告書」

（２）暮らしに息づく材や資源

１）亀岡の名水

「丹波」は、亀岡盆地が旧亀岡湖であった時代に、常に湖面に立っていた赤い波（丹色の波）に由来する。伝承によると、農地としての可能性を見出した大国主命の頼みにより、請田神社の神が土木工事費を出し、鍬山神社の神が保津谷を鍬で拓き、持籠神社の神が土砂を運ぶことで豊かな農地を作ったことが盆地の始まりとされる。以降、伝説から始まり亀岡各地に「名水」に関する場所が点在するようになった¹。大井神社、走田神社、鍬山神社などに名水の由来が残されている。



大井神社の池



走田神社の垂乳味池

２）食文化

大きく蛇行しながら流れる保津川は、平瀬、早瀬、淵など多様な水辺空間を生み出し、有数の淡水魚の生息地となっている。沿岸ではアユ、ハヤ、フナ、ウナギ等の川漁が行われ、大量に採れた魚は、焼いて乾燥させ保存食にしたり出汁を取ったりした。

また地域の特産品として、丹波松茸、丹波くり、丹波大納言（あずき）、犬甘野そば、亀岡牛等が生産されている。畑野町、東別院町、西別院町、本梅町では、かつて寒天づくりが行われていた。寒天を干す棚場の白い風景は冬の風物詩であった。寒天製造は天保 11（1840）年に始まり、戦前には海外に輸出するほど盛んだったが、平成 26（2014）年に生産を終了している。



丹波松茸

出典：亀岡の特産品（市HP）



丹波くり

出典：亀岡の特産品（市HP）



畑野町の寒天場

出典：亀岡の自然 100 選

¹ 市制 50 周年記念事業実行委員会（2005）「小盆地宇宙 亀岡の名水」（株）グラフィック

3) 保津川の水運が育んだ「船頭の里」文化

亀岡盆地を流れる保津川周辺では、古くから水運が発達し、丹波の木材や食材が京都に運ばれていた。保津、山本集落はこの水運の拠点であった。これらの集落は、地形を巧みに利用し、水害から逃れるために段丘上に位置し、周囲には水防に有効とされるタケ類を植栽した。良質のマダケは、船頭が使う棹や竹細工、水防の材料として利用された他、竹筏を組んで京都まで出荷した。集落周辺にはこうした竹林の他、船の櫓ひもとなるシュロも栽培され、船頭の里としての特徴が景観に現れている。

河辺には、度重なる氾濫により肥沃な土壌が堆積し、稲作が行われた。こうした土地は、水はけがよく、冬に乾燥するため、稲刈り後は「保津小麦」の生産が行われた。その一方、水害に備えて、浸水しやすい川沿いの田、浸水しにくい棚田を使い分け、確実にコメを収穫するための工夫も行った。屋敷、棚田では、斜面地を切り開いた際に出る石や、川石で石垣が築かれた。また生活用水には、主に背後の山の谷水を利用した。水をできるだけ汚さないように、汚れたものを洗う場合は移した水を使うなど、水利用に関する規則が住民間で共有された。水飲み場としての「聴泉庵の泉」、洗い場としての「貴船水」など、共有されているものも多い。盆にはイケにたまった泥を浚う「イケがえ」が行われるなど、信仰や年中行事とも深く関係してきた。



保津小麦の生産



竹棚（保津集落）

出典：亀岡市教育委員会（2016）「保津川船下りの文化的景観保存調査報告書」



イケ（山本集落）



共同の水汲み場